



http://www.pref.chiba.lg.jp/ap-kaisou/

発行
千葉県海匠農業事務所
改良普及課
海匠地域農林業振興協議会

千葉県旭市ニの1997-1
電話 0479-62-0334
FAX 0479-62-4482



匠瑛市から輸送された植木



ドバイ IPM での植木での商談の様子



ドバイ郊外の緑化の様子



ドバイ IPM での日本ブースの様子

新たな植木産地の動き

ドバイでの商談

匠瑛市は、全国有数の植木産地として知られており、平成16年頃からは造形樹を中心に植木類の輸出額が増加しています。しかし、世界情勢の変化や輸出検疫制度の見直し等で平成25年から輸出額が減少し、特にEUを中心とするヨーロッパ諸国での販売不振が続いています。そこで、千葉県植木生産組合連合会輸出部会は、昨年までのトルコを中心とした販売実績を基に、本年度からは中東地域のさらなる販売促進強化のため、中東の流通・経済拠点であるアラブ首長国連邦のドバイで開催された展示商談会（DUBAI IPM2019）の日本ブースに匠瑛市産のイヌマキとゴウマツを展示して商談に臨みました。また、大手の造園会社や量販店などに営業訪問を行うなど需要調査も行いました。ドバイの夏期は外気温45℃を超えることから、屋内鑑賞を推奨し、管理方法と併せて提案しました。匠瑛市産の造形美あふれる植木への関心は高く、現地では既に小型盆栽の愛好家もおり、マクロ盆栽（概ね高さ2m、幅2m前後の中型サイズ）の迫力のある造形の美しさに関心の高さが伺え、今後の中東地域での販路拡大に手応えを感じました。

指導農業士・農業士紹介

本年度新たに知事から
認証された方々です

令和元年11月20日に千葉市の「TKPガーデンシティ千葉」にて海匠地域の指導農業士4名、農業士5名が認証されましたのでご紹介いたします。

指導農業士の方



越川浩泰さん
(旭市)

施設花き

シクラメンを中心に、マリールゴルド、ダリア、インパチェンスなど8種類の鉢花を生産しています。大手種苗会社の見本鉢を契約栽培することにより経営を安定させています。



菅生茂樹さん
(旭市)

露地野菜

キャベツ、メロン、リーフレタスを基幹とし、それぞれ面積拡大、高品質栽培、収量向上と、品目ごとに目標を設定し、計画的な規模拡大と雇用導入により、経営の安定を図っています。



高野光永さん
(旭市)

露地野菜・施設野菜

キャベツ、メロン、トマト、リーフレタスなど多品目を施設と露地を組み合わせて生産し、規模拡大に合わせた省力化や効率化に取り組み、トマトの研究会活動や食育にも熱心です。



大木忠さん
(匠瑛市)

植木

植木の生産に加え、優れた植木造形技術をいかして造園施工管理に従事するなど生産と利用の一貫した経営を行っています。信用と雇用確保のために有限会社大千園を設立しました。

農業士の方



片桐一さん
(銚子市)

露地野菜

キャベツを主体とした大面積を効率的に経営し、牛ふん堆肥の施用と定期的な土壌消毒による土づくりにや土壌病害対策により、地域水準の品質・収量を維持しています。



越川重紀さん
(旭市)

露地野菜

大和芋、さつまいも、ニンジンなどを経営し、主力の大和芋栽培では、効果的な連作障害対策を確立し、圃場を有効に利用し、働きやすい作業場の整備に取り組んでいます。



長谷川雅和さん
(旭市)

施設野菜

ミニトマトとアイスプラントを組み合わせた周年雇用体系を実現し、契約販売を取り入れています。ミニトマト栽培では環境制御技術に取り組み、高品質生産をしています。



伊藤千秋さん
(旭市)

施設野菜

飯岡特産のメロンでは、積極的に栽培講習会へ参加し栽培技術の向上に努め、連作障害を回避し、安定した収量・品質を確保しています。雇用導入により規模拡大を目指しています。



宇野隆英さん
(匠瑛市)

施設野菜

主力のキュウリ栽培では、地域でもいち早く炭酸ガス施用機を導入し、収量を向上させました。現在は環境モニタリング装置を導入し、ハウス内環境の見える化を図っています。

海匠農業活性化
フォーラムの開催について

現場のリスクから学ぶ新時代の農業経営

「点検！改善！効率アップ」多くの外国人技能実習生の受入とGAPの取組により、小松菜周年栽培で1日1tの出荷量を実現し、さらに作業の効率化と肥料、農薬、資材費を大幅に削減。これらにより農林水産大臣賞（GAP部門）を受賞した農家とその指導員の事例です。

日時 令和2年1月24日（金）

午後1時30分から

場所 千葉県東総文化会館

小ホール

内容 点検と改善で農業生産の

レベルアップ

【お問合せ先】

海匠農業事務所改良普及課

047916210334

水稲新品種「粒すけ」の栽培のポイント

千葉県では幅広い世代の方に、家庭用から中食・外食用まで、県産米を食べていただけるよう、多収で良食味な新品種「粒すけ」を開発しました。「粒すけ」は、大粒で炊飯米は白く光沢に優れ、程よい粘りと弾力があり、いろいろな料理に合う食感などの特徴があります。

品種の特性

成熟期は、「コシヒカリ」並です。(例 4/20 移植期→8/27成熟期) 稈長は82cmで、「コシヒカリ」より10cm程短く、耐倒伏性が強く、穂長は「コシヒカリ」並です。穂数は、410本/m²で、「コシヒカリ」よりやや少なく、玄米の長さ、幅は「コシヒカリ」より大きく、玄米千粒重は、22・4gで、「コシヒカリ」より約10%重い大粒です。目標収量は630kg/10aです。食味は、「コシヒカリ」と比べて並〜やや良です。



左「粒すけ」 右「コシヒカリ」

栽培方法のポイント
播種量：千粒重が大きいため、「コシヒカリ」より1割程度多くし、一箱当たり150g程度(乾籾重)とします。
栽植密度：55〜60株/坪(株間18cm〜20cm)とし、疎植にしない。

施肥量：砂壤土で、移植時期4月下旬〜5月上旬の場合、基肥は10a当り窒素6kg、りん酸7〜9kg、加里8kgとします。「コシヒカリ」の慣行の窒素施肥量の1・5〜2倍が目安です。移植時期が、5月中旬の場合は、基肥窒素量を1〜1・5kg/10a程度減らします。穂肥は、10a当り窒素3kg、加里3kgとし、出穂前18日(幼穂長1cm)に施用します。

一発肥料(全量基肥栽培)では、「コシヒカリ」専用の一発肥料を使用しますが、窒素成分が速効性(基肥)50%：緩効性(穂肥)50%のため、この肥料を用い穂肥窒素量の基準量から計算すると、基肥窒素量が不足する場合があります。その際は、基肥窒素量の不足分を代かき前に全面全層施肥で補ってください。
成熟期：出穂期後38日程です。
調製：「粒すけ」は、粒が大きいので、籾すり機のロール幅を「コシヒカリ」より、やや広く設定します。(写真提供 農林総合研究センター)



左「粒すけ」 右「コシヒカリ」

表1 一発肥料による施肥例(砂壤土) (kg/10a)

N-P-K (%)	施用量	基肥N量	追肥N量
基本肥一発型肥料 15-12-10 (速効性50% 緩効性50%)	40	3.0	3.0
化成肥料 8-18-10	37.5	3.0	
合計		6.0	3.0

制度情報

飼料用米などの作付けによる需要に応じた米生産を

平成30年産以降、国による「米の生産数量目標」の配分は廃止されましたが、米の需要量は減少傾向にあり、需給と価格の安定を図るためには、引き続き、米の生産調整が必要です。これまでも同様に、飼料用米などの作付けによる「需要に応じた米生産」に取り組みましよう。稲作農家には、各市農業再生協議会から主食用米の「生産目安」が示されます。生産目安に沿った作付けをお願いします。

飼料用米に取り組む際には、国・県の助成制度が充実しており、収穫期の作業ピークを分散できる「多収品種」をお勧めします。

県では国の交付金への上乗せ助成のほか、5ha以上の多収品種による団地化は場への助成、飼料用米・加工用米用フレコン計量ユニット(計量器、貯留タンク、昇降機)への助成など、各種助成制度を設けています。また、市でも独自に助成を行っています。

取組の申請や収入試算等、詳細については、各市農業再生協議会(各市農政担当課)にお問い合わせください。



スクミリンゴガイ対策

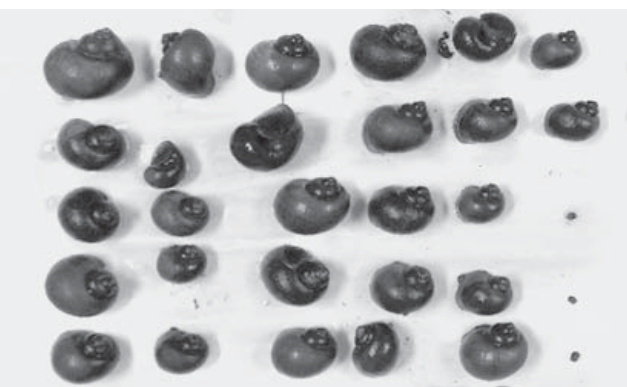
○用水だけでなく排水口にも、侵入防止策(ネットや金網)を講じましょう。

ほ場内はスクミリンゴガイの天敵が極端に少ないため、侵入を許すとほ場内で爆発的に増加します。土排水路とつながっており、排水路との高低差が少ないほ場(写真1)では、土排水路からの侵入に特に注意する必要があります。



(写真1)土排水路とつながるパイプ

こうしたほ場ではスクミリンゴガイが土排水路から侵入しやすい傾向にあり、2週間で50匹近く侵入した例もあります。また、水路の条件によっては、土排水路から穀高3cm以上の大型の貝が侵入することがあります。(写真2)大型の貝ほど、食べる稲の量は多くなり、貝は多く、注意が必要です。



(写真2) 6/10〜6/27に土排水路から侵入したスクミリンゴガイ

侵入の可能性は栽培期間を通じてありますので、代かき前から稲刈り時まで侵入防止を行います。

よくある質問

Q: ネットの目合いは出来るだけ細かい方が良いですか?
A: もちろん細かい方がより多くの貝を防げますが、その分目詰まりしやすくなるため、5mm〜10mm目合いを目安とします。

種籾用程度の大きめのネットを使えば多少目詰まりしても通水に問題はありませぬ。排水パイプに設置する場合は、通水確保のために排水路側に設置しましょう。

イネばか苗病対策について

○イネばか苗病とは?

近年、種子伝染性の「イネばか苗病」の発生が増えています。1・5〜2葉期の黄化徒長が特徴で、発生が激しい場合は減収する恐れがあります。また、カビが原因の病害であるため、胞子が空中に飛散することで感染を拡大させます。さらに、旭市海上地区の「採種ほ(水稲の種子生産ほ場)」では、周辺ほ場で「イネばか苗病」が発生したため、水稲種子を十分に生産できない状況になっていきます。優良種子の安定供給のために「イネばか苗病」撲滅対策をお願いいたします。



黄化徒長が特徴的な罹病苗

○イネばか苗病の防除について

(1) 的確な種子消毒の実施

種子消毒剤は効果の高い化学合成農薬(ヘルシードTフロアブル等)を使用します。浸漬は種もみと薬液の容量比を1対1以上とし、複数回使用しません。浸漬の際は種もみ袋を良くゆすり、薬液が中心まで行きわたるようにします。このとき液温が低いと効果が落ちるため、液温は10度以下にならないように注意します。消毒後は表面が乾くまで陰干しした後に浸種を開始します。

(2) 種子の更新

イネばか苗病は種子伝染するため、発病ほ場からは採種を行わないようにしてください。

(3) 環境衛生の徹底

作業場所やその周辺から伝染源となる稲わら、籾殻、米糠、粉じん等を除去します。また、浸種、催芽、育苗で使用する機器や容器はあらかじめ十分洗浄します。

(4) 病苗、病株の廃棄

病気が発生した場合の防除薬剤はないため、病苗、病株は発見次第、直ちに抜き取り廃棄してください。

